



TITLE:

蘇軾の吏隠：密州知事時代を中心に

AUTHOR(S):

湯浅, 陽子

---

CITATION:

湯浅, 陽子. 蘇軾の吏隠：密州知事時代を中心に. 中國文學報 1994, 48: 63-93

ISSUE DATE:

1994-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177559>

RIGHT:

## 蘇軾の吏隱

——密州知事時代を中心に——

湯 淺 陽 子

京都大學

北宋神宗の熙寧七年（一〇七四）、當時三十九歳の蘇軾（一〇三八—一二〇二）は、知事として密州（現山東省諸城縣）に赴任した。當時の中央では新法の勢力が強く、蘇軾は杭州通判に續いて地方官だったのである。

當時の密州は蝗害による凶作に苦しんでおり、着任した蘇軾には、まずこの災害を克服し治安を回復することが求められた。厳しい環境に對して知事としての責任を背負うことになった當時の蘇軾の詩文には、官吏としてあるべき自己と、それに反する隱への志向の葛藤を反映した表現を見ることが出来る。ここではそれらの表現に着目して、蘇軾の生涯に於て比較的早い時期に當るこの密州知事時代を

蘇軾の吏隱（湯淺）

中心に彼の吏隱觀を考察したい。それはこの後、紆餘曲折を経ながらも生涯官吏であり續ける蘇軾の吏隱觀を考える上での基本と見なせるものではないだろうか。

### 一

蘇軾は熙寧八年（一〇七五）十一月に、密州守居の庭園の北にあった古い樓臺を修理した。この臺には、蘇轍によって「超然」という名が付けられたが、この超然臺に寄せて、蘇轍、文同、鮮于侁、張耒、李清臣が「超然臺賦」を、司馬光、文彥博が「超然臺詩」<sup>①</sup>を、そして蘇軾が「超然臺記」<sup>②</sup>を制作している。本章ではまずこの超然臺をめぐる作品群に着目して、知密州であった當時の蘇軾が、自己の吏隱をどのように位置付けているかを考えたい。

さて、庭園、亭、臺、堂などの所有者が友人や著名人に詩文を乞うことは、當時の士大夫、文人の間で習慣的に行われており、蘇軾にも多くの作例を見ることが出来る。この超然臺をめぐる詩文も當時のこのような習慣の中で生み出されたものである。

また、この超然臺のような地方官舎の庭園は、代々の赴任者によって整備され、彼等の休息や友人達との遊樂、賓客の接待に當てられたものらしい。その主な例として、知滁州期の歐陽修の醉翁亭、知定州期の韓琦の衆春園、知洋州期の文同の洋川園池等を擧げることができるが、これらは皆、彼等の詩文制作の題材となっており、さらにそれらの詩文が、何人もの人と應酬されていることは、個人所有の庭園を題材とする場合と同じである。蘇軾もまた、彼等と同様に、鳳翔簽書判官時代には喜雨亭を、この知密州時代には超然臺と蓋公堂を、知徐州時代には黃樓を作り、それぞれについて知人と詩文を應酬している。<sup>③</sup>

加えて、このような官舎に付屬する亭臺は、この超然臺がそうであるように、災害の復興、治安の安定を記念するものとして建設される場合も多かったようである。例えば、この後蘇軾が徐州で建てた黃樓は、治水工事の完成を記念するものである（蘇轍「黃樓賦」并敘（樂城集卷十七）にその経緯が記されている）。し、また歐陽修は「泗州先春亭記」（居士集卷三十九）を、知泗州の清河張公（傳未詳）が淮水の治水

工事の完成を記念して建てた亭に寄せ、その中で、張公が治水完成の後、まず接客や、租税出納の用に當てる亭を作った後に自分個人の閑居を樂しむ場である先春亭を作ったことを、「知爲政也。（爲政を知れるなり。）」と評價している。

これらの例に見られるような、地方官としての責任である任地の治安の安定が確保された後に、自己の樂しみを追求するという順序は、當時の士大夫にとっては、そうあるべきものとして類型化されていたものであり、ここで考察の對象としている密州知事蘇軾の遊樂の場である超然臺も、その類型に沿ったものであろう。そうであるなら、そこで行われる知事蘇軾の吏隱の遊も、當時の地方官の吏隱のあり方に沿うものであると思われる。この超然臺に寄せられた詩文のうちでも、司馬光がその「超然臺詩寄子瞻學士（超然臺詩子瞻學士に寄す）」（司馬溫公文集卷十二）の中で、

曷時守高密 曷時 高密に守たり  
民安吏手斂 民は安く吏は手を斂む  
乘間爲小臺 間に乘じて 小臺を爲り  
節物得周覽 節物 周覽するを得

と、治安の安定の後の「間に乗じた」臺の造營と遊樂を表現し、また文彦博が「寄題密州超然臺（密州超然臺に寄題す）」詩（謫公文集卷三）で同様

琴觴興不淺 琴觴 興淺からず

風月情更深 風月 情更に深し

民被袴襦惠 民は袴襦の惠を被り

境絕枹鼓音 境は枹鼓の音を絶つ

と、遊樂とその背景となる密州の治安の安定を述べているのは、そのような地方官の遊樂のあるべき形に沿って表現されたものだろう。

\*

さて、このような地方官としての立場を離れない楽しみの態度について、蘇軾は「超然臺記」（東坡集卷三十二）の冒頭で次のように述べている。

凡物皆有可觀。苟有可觀、皆有可樂。非必怪奇瑤麗者也。餽糟啜滴皆可以醉、果蔬草木皆可以飽。推此類也、吾安往而不樂。夫所爲求福而辭禍者、以福可喜而禍可

蘇軾の吏隱（湯淺）

悲也。人之所欲無窮、而物之可以足吾欲者有盡。美惡之辨戰爭中、而去取之擇交乎前、則可樂者常少、而可悲者常多。是謂求禍而辭福。夫求禍而辭福、豈人之情也哉。物有以蓋之矣。彼遊於物之内、而不遊於物之外。物非有大小也、自其内而觀之、未有不高且大者也。彼挾其高大以臨我、則我常眩亂反覆、如隙中之觀鬪、又烏知勝負之所在。是以美惡橫生、而憂樂出焉。可不大大哀乎。「辭」は内閣文庫藏『東坡集』では「詞」に作るが他本により改める。）

凡そ物は皆觀るべき有り。苟くも觀るべき有らば、皆樂しむべき有り。必ずしも怪奇瑤麗なる者に非ざるなり。糟を餽ひ滴を啜るも皆以て酔ふべく、果蔬草木も皆以て飽くべし。此の類を推すや、吾れ安くにか往きて樂しまざる。夫れ福を求めて禍を辭す所爲は、福は喜ぶべくして禍は悲しむべきなるを以てなり。人の欲する所は窮まる無くして、物の以て吾が欲を足たすべき者は盡くる有り。美惡の辨中に戦ひて、去取の擇前に交はれば、則ち樂しむべき者は常に少なくて、悲

しむべき者は常に多し。是れを禍を求めて福を辭すと謂ふ。夫れ禍を求めて福を辭するは、豈に人の情ならんや。物以て之を蓋ふ有ればなり。彼は物の内に遊べども、物の外に遊ばず。物に大小有るに非ざるなり、其の内よりしてこれを觀れば、未だ高くして且つ大ならざる者有らざるなり。彼れが其の高大を挾みて以て我に臨めば、則ち我は常に眩亂反覆して、隙中の觀闌の如く、又た烏くんぞ勝負の在る所を知らんや。是を以て美惡ほしき横よこに生じて、憂樂出づ。大いに哀しまざるべけんや。

ここで蘇軾は、人はいかなるつまらない物に對しても満足を見出すことができるものだと言っているのだが、實際に蘇軾がこの超然臺での遊びにおいて、贅澤を求めず、密州で得られる質素なものを樂しもうとしていることは、記の後半で、「擲園蔬、取池魚、釀秫酒、滄脫粟而食之曰、樂哉遊乎。(園蔬を擲み、池魚を取り、秫酒を釀し、脫粟を滄して之を食らひて曰く、楽しいかな遊やと。)」と、ありあわせの質素な酒肴を樂しむと表現していることから知ることが

できる。

なお蘇軾は、ここに引いた部分で、人が「物」によって引き起こされる善惡や憂樂といった價值判斷に悩まされるのは、様々な違いを持った「物」に固執するからだと言へ、さらにこの記の末尾の部分では、「超然」というこの樓臺の名前は、自己がどのような狀況をも樂しむことができるのは、「物」が持っている違いにこだわらないからであることを表すものだとしている。このような考え方は、當時の蘇軾が荒廢した密州に左遷されていたという狀況に關わるものだと思うが、この「超然」の境地は、現實に様々な差異を持っている物事の中で自分の心の安定を得るために、眼前にある現實の「物」の持っている差異に價值判斷を加えず、自分の精神をそれらの「物」から離脱した、より高度に精神的な世界に遊ばせようとするものであると思われる。

さて、この蘇軾がこの「物の外」の境地を實行しようとした臺に、當時齊州(現山東省濟南市)書記であった子由(蘇轍の字)は「超然」と名付けたのだが、その經緯が蘇軾の

「超然臺記」の末尾に次のように記されている。

方是時、余弟子由適在濟南、聞而賦之、且名其臺曰超然。以見余之無所往而不樂者、蓋遊於物之外也。

方に是の時、余が弟子由適たま濟南に在り、聞きて之を賦し、且つ其の臺に名づけて超然と曰ふ。以つて余の往く所として樂しまざる所無きは、蓋し物の外に遊ぶを見はすなり。

蘇軾はここで、この「超然」が、彼の「物の外に遊ぶ」故にどんな狀況をも樂しむ境地を言い表したものとて歡迎しているが、では、名付けた蘇轍自身が考えた「超然」も、やはり同様の境地だったのだろうか。蘇轍「超然臺賦」の敍の部分は次のように述べている。

幾年而後少安、顧居處隱陋、無以自放、乃因其城上之廢臺而增葺之。日與其僚覽其山川而樂之、以告轍曰、「此將何以名之。」轍曰、「今夫山居者知山、林居者知林、耕者知原、漁者知澤、安於其所而已、其樂不相及也。而臺則盡之。天下之士、奔走於是非之場、浮沈於榮辱之海、翫然盡力而忘反、亦莫自知也。而達者哀之。

蘇軾の吏隱（湯淺）

二者非以其超然不累於物故邪。『老子』曰、「雖有榮觀、燕處超然。」嘗試以『超然』命之、可乎。」

幾年しての後少や安んじ、居處の隱陋にして、以て自ら放つ無きを顧み、乃ち其の城上の廢臺に因りて之を増葺す。日び其の僚と其の山川を覽て之を樂しみ、以て轍に告げて曰く、「此れ將<sup>は</sup>た何を以て之に名づけん」と。

轍曰く、「今夫れ山居する者は山を知り、林居する者は林を知り、耕する者は原を知り、漁する者は澤を知るも、其の所に安んずるのみにして、其の樂は相ひ及ばざるなり。而も臺は則ち之を盡くす。天下の士は、是非の場に奔走し、榮辱の海に浮沈し、翫然として力を盡くして反るを忘れ、亦た自ら知らざるなり。而も達者は之を哀しむ。二者は其の超然として物に累<sup>わづら</sup>はざるを以ての故に非ざるか。『老子』曰く、『榮觀有り」と雖も、燕處して超然たり」と。嘗試みに『超然』を以て之に命けん。可ならんか」と。

ここで蘇轍は、この臺が山居（山）、林居（林）、耕者（原）、漁者（澤）の樂をすべて得ていること、また、達人が天下の

士人が是非、榮辱に奔走して自分を失っているのを哀しむのは、この臺と達者が、等しく現世的な「物」の世界を超越していることによると述べ、さらにこれを『老子』の「燕處超然」の境地であるとして、この臺に「超然」と名付けている。

では、蘇轍が「超然」の典故としている『老子』第二十六章を見てみよう。

重爲輕根、靜爲躁君。是以聖人、終日行不離輜重、雖有榮觀、燕處超然。奈何萬乘之主、而以身輕天下、輕則失本、躁則失君。

重きは輕きの根爲り、靜かなるは躁がしきの君爲り。是を以て聖人は、終日行きて輜重を離れず、榮觀有りと雖も、燕處して超然たり。奈何ぞ萬乘の主にして、身を以て天下に輕がろしくせんや。輕がろしくすれば則ち本を失ひ、躁がしければ則ち君を失ふ。

ここでは、どっしりと靜かに落ち着いた聖人が、壯麗な眺めを前にしても心を動かすことがない様子を「超然」と表現しており、對象物からの精神的な離脱を意味している

點で、蘇軾、蘇轍が言う「超然」の意に等しいと思われる。しかし、本來の『老子』の「超然」が壯麗な眺め（榮觀）に對して心を動搖させないことであるのに對して、ここでの蘇軾、蘇轍は「超然」の對象をそれぞれ別の方向に、さらに擴大しているのではなからうか。

まず蘇轍は「超然」を二つの側面から説明している。その一はこの臺で得られる樂が山林原澤のうちの特定の樂に片寄らないことであり、その二は超俗の達人が世俗を批判することである。

そもそもこの「超然」という語は、『老子』を典故として、『楚辭』屈原「卜居」の「將從俗富貴以媮生、寧超然高舉以保眞乎。（將に俗に従ひ富貴にして以て生を媮<sup>た</sup>しまんか、寧ろ超然として高く舉がり以て眞を保たんか。）」以降、君子が俗人の群から拔きん出て俗界を顧みない高踏的な有り様を表現するものとして用いられるものである。<sup>④</sup>蘇轍が「超然臺賦」の本文で、俗界から脱した君子の宴樂の様子を描いているのも、この從來の「超俗」の意味を踏まえたものであろう。

また、文同「超然臺賦」、鮮于侁「超然臺賦」が、蘇轍と同様に達人の超俗という方向で「超然」を捉え、その天空逍遙を描寫しているのも、その傳統を踏まえていると思われるが、それについては蘇軾自身が、「書文與可超然臺賦後（文與可の超然臺賦の後に書す）」（東坡外集卷三十九）で、「其爲超然辭、意思蕭散、不復與外物相關。其遠遊、大人之流乎。（其の超然の辭を爲るや、意思蕭散として、復た外物と相ひ關せず。其れ遠遊、大人の流か。）」と述べ、文同のこの賦が、屈原の「遠遊」や司馬相如の「大人賦」のイメージを踏襲するものであると述べている。文同、蘇轍、鮮于侁が用いた賦という表現の形態も、古典的なイメージを展開するにはふさわしいものであると言えよう。

さきに見たように、蘇轍は臺と達人がどちらも「物に累はざる」ものであるとしているが、臺が山林耕漁のいずれの樂にも片寄らない樂の場であるとは、つまりはそれだけこの臺がこれといった環境上の特色を持たないことを表しているとも言えるだろう。つまり「超然」という名付けはこの臺を美化する意圖を明白に表している。さらに蘇轍は

蘇軾の吏隱（湯淺）

合わせてこの臺に遊ぶ蘇軾をも超俗の達人として美化しようとしていると言うこともできよう。

それに比して蘇軾の記の「超然」はどうだろうか。先に見たように蘇軾は俗世間の満足できない状況に對しても精神を動搖させずに、なおその現實のなかに留まろうとする姿勢を「超然」と表現していた。これは、蘇轍の「超然」が「超俗」の謂であつたことと比べると、「俗」のなかにとどまろうとする姿勢を表しているという大きな違いを持っている。蘇軾は「超然」という語が傳統的に持つ「超俗」の意を充分に理解しながら、敢えてそれを今の自己に求められるべき「非超俗」の姿勢として意味付けようとしていると言えるだろう。つまり、蘇轍が臺に「超然」（『超俗』と名付けたことは蘇軾の本意ではなかったのである。このように傳統的な脱俗の思想である「超然」を、蘇軾が敢えて世俗社會の存在である知事の楽しみにふさわしいものとして意味付け直してみせようとしていることには、蘇軾の官吏としての強い意欲と、理想とされている吏隱の姿を窺うことができるのではないだろうか。



二

前章では、蘇軾の「超然臺記」に表現された「超然」の境地が、俗界からの離脱を志向するものではなく、眼前の様々な事物に耽溺せず、心だけを、「物」の外に自由に遊ばせようとするものであることを考察した。このような「物」（對象）からの超然という姿勢は、この「超然臺記」以外にも、當時の蘇軾の詩文に見られるものであり、例えば「張安道樂全堂」詩（合註卷十三）には次のような表現を見ることができ、

列子御風殊不惡

列子の風を御するは殊に惡からざるも

猶被莊生譏數數

猶ほ莊生に數數たりと譏らる

歩兵飲酒中散琴

歩兵は飲酒し 中散は琴

於此得全非至樂

此において全きを得るは至樂に非ず

樂全居士全於天

樂全居士は天に全くし

維摩丈室空翛然

維摩の丈室 空しく翛然たり

この詩は張方平（字安道 一〇〇七——一〇九一 『宋史』卷

三一八有傳）が商丘に築いた樂全堂に寄せたものであるが、

風に馭す列子、飲酒する阮籍、琴を好む嵇康の三者が「物」に依存して全きを得ていたのに比べて、既に天全の境地にある樂全居士は、何物にも依存せずに全きを得ていると譽めており、これもまた「物」による閑適から離れようとする姿勢を反映していると思われる。重ねてこの詩の末尾にも、

試問樂全全底事

試みに問はん 樂の全きは底事（な底こと）を  
か全くすると

無全何處更求虧

全き無ければ 何れの處にか更に  
虧けたるを求めん

と、「樂全」という堂の名の意味を解き、完全な樂を樂しむには、酒や琴といった外的で不完全な「物」を求める必要はなく、自得することのみが大切であると、外物に依存しない自己の内面的な充足を強調している。ここにも、價值判斷を伴わないではいられない外的な「物」に依存した吏隱を批判する意圖を見ることができよう。

さて、この「張安道樂全堂」詩の一、二句目の用いる列

子のエピソードは『莊子』逍遙遊篇に見えるものであり、ここで莊子は「猶ほ恃む所有る」列子を批判しているのだが、この詩では蘇軾が他にも「至樂」(至樂篇)「全於天」(達生篇)「翛然」(大宗師篇)と『莊子』を典拠とする語を何度も重ねて使用していることは、この「物」に依存しない樂が、『莊子』の齊物の思想にも強く影響されていることを表している。

同様に「和蔣夢寄茶(蔣夢の茶を寄するに和す)」詩(合註卷十三)は次のように表現している。

人生所遇無不可	人生遇ふ所	可ならざる無く
南北嗜好知誰賢	南北の嗜好	誰か賢れるを知らん
や		

死生禍福久不擇	死生禍福	久しく擇ばず
---------	------	--------

更論甘苦爭蚩妍	更に甘苦を論じて蚩妍を争はんや
---------	-----------------

ここで言う「南北嗜好」は、この詩の前半で列舉している杭州と密州それぞれの美味なるものを指している。杭州と密州、兩地の食べ物の比較などは、「死生禍福」という大きな価値の判断さえやめた自己にとってはもうどうでも

いいことだ、という蘇軾の言葉には「物」に對する價值判断から逃れ、莊子的な齊物の境地へ接近する姿勢が表れている。

さて、このような「物」への依存、固執を戒める表現は、知密州時代の詩文のみならず、その前後の時期に制作されたいくつかの記にも見ることができ、そこでは「物」とそれを樂しむ主體との關係について、更に明確な表現がなされている。

まず、密州期に先立つ杭州通判期の「墨妙亭記」(東坡集卷三十一)は、熙寧五年二月(南宋、施宿の『東坡先生年譜』による)に、守湖州(現浙江省湖州市)の孫覺(字辛老、一〇二八—一〇九〇『宋史』卷三四四有傳)が墨妙亭を官舎の北の逍遙堂の東に建て、湖州境内の漢以來の古文遺物を集め石に刻し、藏したことに寄せた記である。この記の中では、孫覺が着任してからの松江の氾濫による湖州の凶作、飢饉、人民の逃亡、それらの状態の孫覺の盡力による克服を述べ、その上で孫覺が、餘暇に楽しんでた古文の収集に言及しており、これもまた、前章で既に見た、士大夫の社會的な

義務を果たした後での個人的な快樂の追求という型に沿ったものであると思われる。

さて、その第三段で蘇軾は、吏隱の際の對象物に對する態度について述べている。

或以謂余、「凡有物必歸於盡、而特形以爲固者、尤不可長、雖金石之堅、俄而變壞、至於功名文章、其傳世垂後、猶爲差久。今乃以此託於彼、是久存者反求助於速壞。是既昔人之惑、而莘老又將深簷大屋以錮留之。推是意也、其無乃幾於不知命也夫。」余以爲「知命者、必盡人事、然後理足而無憾。物之有成必有壞、譬如人之有生必有死、而國之有興必有亡也。雖知其然、而君子之養身也、凡可以久生而緩死者無不用、其治國也、凡可以存存而救亡者無不爲、至於不可奈何而後已。此之謂知命。是亭之作否、無足爭者、而其理則不可以不辨。

或ひと以て余に謂へらく、「凡そ物有らば必ず盡に歸し、形を待みて以て固しと爲す者は、尤も長かるべからず。金石の堅きと雖も、俄にして變壞し、功名文章

に至りては、其れ世に傳はり後に垂ること、猶ほ差や久しと爲す。今乃ち此を以て彼に託すは、是れ久しく存する者は反つて速く壞るるに助けを求む。是れ既に昔人の惑へるところなり、而も莘老は又た深簷大屋を將ちて以て之を錮留す。是の意を推すや、其れ乃ち命を知らざるに幾きこと無からんか」と。余以爲らく「命を知る者は、必ず人事を盡し、然る後に理足りて憾む無し。物の成る有らば必ず壞る有るは、譬へば人の生有らば必ず死有りて、國の興る有らば必ず亡ぶ有るが如し。其の然るを知ると雖も、君子の身を養ふや、凡そ以て生を久しくして死を緩くすべき者の用ひざる無く、其の國を治むるや、凡そ以て存を存して亡ぶを救ふべき者の爲さざる無く、奈何ともすべからざるに至りて後に已む。此を知命と謂ふ。是の亭の作るや否やは、爭ふに足る無き者にして、其の理は則ち以て辨ぜざるべからず」と。

この問答では、刻々と變化していく無常の存在である「物」に執着することを天命を知らぬものとして否定する

「或」(ある人)に對して、蘇軾は、人生の有限、世の無常を知りながらもその限界に働きかけようとするのが、人の天命のことわりであると答え、孫覺の作亭に對して理念の上から批判しているのがわかる。

これは鳳翔簽書判官時代の嘉祐八年(一〇六三)の「凌虛臺記」(東坡集卷三十二)で「物之廢興成毀、不可得而知也。

(物の廢興成毀は、得て知るべからざるなり。)」と、物は變化していくものであつて、この凌虛臺とても永遠のものではない、と目に見える物の世界の有限を言い、物への耽溺を戒めていたのと同様の主旨を述べるものである。<sup>⑥</sup>

次に、知密州期に續く知徐州期の蘇軾の記は、友人が私的に作った亭や堂に寄せたものが大部分であり、密州期の「超然臺記」が公的な性格を持つ官舎にある建物に寄せられたものであつたのとは、いくらか性格を異にしている。

蘇軾は、熙寧十年七月に、王詵(字晉卿、『宋史』卷二五五有傳)が私邸の東に寶繪堂を作り、所藏品を貯え、記を求めたのに答えた「寶繪堂記」(東坡集卷三十二)の第一段で、君子の書畫の樂しみのあり方について次のように述べてい

蘇軾の吏隱(湯淺)

る。

君子可以寓意於物、而不可以留意於物。寓意於物、雖微物足以爲樂、雖尤物不足以爲病。留意於物、雖微物足以爲病、雖尤物不足以爲樂。老子曰、「五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵令人心發狂。」然聖人未嘗廢此四者、亦聊以寓意焉耳。

君子は以て意を物に寓すべきも、以て意を物に留むべからず。意を物に寓すれば、微物と雖も以て樂しみに爲すに足り、尤物と雖も以て病と爲すに足らず。意を物に留むれば、微物と雖も以て病と爲すに足り、尤物と雖も以て樂しみに爲すに足らず。老子曰く、「五色は人の目をして盲ならしめ、五音は人の耳をして聾ならしめ、五味は人の口をして爽<sup>な</sup>はしめ、馳騁田獵は人の心をして發狂せしむ」と。然るに聖人の未だ嘗つて此の四者を廢さざるは、亦た聊か意を寓するを以てのみ。

ここで蘇軾は、君子は物に一時的に心を寄せることによつて、微小な對象に對しても樂しみを見出すことができる

が、その物に固執してはならず、固執するならば、どんな優れた物であっても楽しみとはならないと説いている。

このように「墨妙亭記」「寶繪堂記」「凌虛臺記」は、どれも士大夫が私的な書畫、庭園の愛好に耽溺することを戒めているが、密州期以前の「凌虛臺記」「墨妙亭記」が「物」の無常、有限性を強調していたのに對して、密州期以後の「寶繪堂記」は「物」による楽しみを論點としており、蘇軾自身の關心の中心の變化を反映するものではないかと思われる<sup>⑦</sup>。

さて、本章ではここまで士大夫の閑適生活、つまり吏隱について考察してきたが、士大夫とは對照的な立場にあると思われる、隱逸者の場合について述べた文章と比較し、兩者に對する蘇軾の捉え方の違いを明らかにしておきたい。ここで取りあげる「放鶴亭記」（東坡集卷三十二）は、記の末尾の記述から、元豐元年一月八日に徐州で作られたことが明らかである。この記は、雲龍山人張天驥（傳未詳）が東山の麓に居を移し、異境を得て作った亭に寄せられたものであり、蘇軾は、張天驥の飼っている鶴が朝に放たれ

暮れに歸ることにちなんで、この亭を放鶴亭と名付けている。ここでは記後半の蘇軾と張天驥の會話の部分を見てみよう。

郡守蘇軾、時從賓客僚吏往見山人、飲酒於斯亭而樂之、挹山人而告之曰、「子知隱居之樂乎。雖南面之君、未可與易也。『易』曰、『鳴鶴在陰、其子和之。』『詩』曰、『鶴鳴于九皐、聲聞于天。』蓋其爲物、清遠閑放、超然于塵垢之外、故『易』詩人以比賢人君子隱德之士。狎而玩之、宜若有益而無損者、然衛懿公好鶴則亡其國。周公作酒誥、衛武公作抑戒、以爲荒惑敗亂無若酒者、而劉伶、阮籍之徒以此全其真而名後世。嗟夫南面之君、雖清遠閑放如鶴者猶不得好、好之則亡其國、而山林遁世之士、雖荒惑敗亂如酒者猶不能爲害、而況於鶴乎。由此觀之、其爲樂未可以同日而語也。」山人听然而笑曰、「有是哉。」

郡守蘇軾、時に賓客僚吏を從へて往きて山人に見え、斯の亭に飲酒して之を樂しみ、山人に挹して之に告げて曰く、「子は隱居の樂を知れるか。南面の君と雖も、

未だ與に易ふべからざるなり。『易』に曰く、『鳴鶴陰に在り、其の子之に和す』と。『詩』に曰く、『鶴九臯に鳴けば、聲天に聞こゆ』と。蓋し其の物爲るや、清遠閑放にして、塵垢の外に超然たり、故に『易』詩人以て賢人君子隱德の士に比す。狎れて之を玩べば、宜しく益有るも損無き者の若かるべし、然るも衛懿公は鶴を好めば則ち其の國を亡ぼす。周公は酒誥を作り、衛武公は抑戒を作り、以て荒惑敗亂は酒に若く者無しと爲<sup>す</sup>、而も劉伶、阮籍の徒は此を以て其の眞を全くして後世に名あり。嗟、夫れ南面の君は、清遠閑放鶴の如き者と雖も猶ほ好むを得ず、之を好めば則ち其の國を亡ぼす、而るに山林遁世の士は、荒惑敗亂酒の如き者と雖も猶ほ害を爲すこと能はず、而るを況んや鶴に於てをや。此に由りて之を觀るに、其の樂爲るや未だ以て同日に語るべからざるなり」と。山人听然として笑ひて曰く、「是有るかな」と。

ここで蘇軾は、鶴は經書で聖人君子に喩えられるが、衛懿公は鶴を好んで國を滅ぼした。一方、酒は最も人に害に

蘇軾の吏隱（湯淺）

なるものであるにも関わらず、隱遁者である劉伶、阮籍はその眞を全うし、後世に名を残した。君主は鶴のようなものでも飼うことができないが、隱者は酒にも害されないのだから鶴を飼っても大丈夫なのだ、と山人が鶴を飼うことを正當なこととしている。

このように、蘇軾は君子と隱者には全く別の倫理があり、隱者は酒、鶴といった娛樂の對象にも心を奪われることはないとしている。この記のなかで蘇軾は鶴を「塵垢の外に超然たる」ものとしていたが、この鶴を愛好しながらその中に溺れない隱者は、老莊的な「天全」「無心」の境地に達しているが故に、「物の外に超然たる」存在であり得るのだろう。

儒教の理念は、士大夫は個人的な世界にのみ閉じこもる「獨善」であるべきではなく、社會全體に役立つ「兼濟」を旨とすべきものであり、蘇軾はこれを踏まえて、士大夫が様々な差異を持つ有限の「物」に固執することを戒めていた。蘇軾は、個人的に「物」を愛好することは、俗界から「超然」と抜け出し、精神を「物」に動搖させられるこ

とのない境地に至った隱者にあって、初めて許されることとしており、ここには蘇軾が、士大夫と隱逸者の性格をはつきり區別し、前者は儒教的な道德に従い、後者は老莊的な天全の境地に至った、儒教的な倫理の外にある存在と捉えていることが現れている。

さて、このような「物」への執着を批判する蘇軾の態度は、一見すると、日常の生活の中身にある「物」を凝視しようとすることを一つの特色とする宋詩の性格と、相反するもののように思われる。しかし、どちらにも共通するのは「物」に對する意識の強さであり、蘇軾がことさらに士大夫と隱逸者を區別して、精神を動搖させることのない隱逸者にのみ「物」の愛好を認め、一方でその境地を自己のものとしていない士大夫については、その「物」への執着を批判していることにはかえって、既に書畫、庭園等の愛好が士大夫に一般的になっていた當時の状況や、蘇軾自身も實はその「物」が自己を引きつける魅力の強さを熟知していることが窺われる。「墨妙亭記」に人間は「物」の無常の限界に働きかけないではいられないものだとする表現

が見られたが、蘇軾が、彼等の個人的な愛好を否定しきれていないことにも注意しておきたい。

### 三

では蘇軾はなぜ自己の吏隱の態度として、このようにその樂しみの對象となる「物」に執着しないことを、繰り返して強調したのだろうか。それは「物」の愛好を特徴とする吏隱のあり方を否定しようとするものと言うことができるだろう。

それではこの「物」を愛好する吏隱とは、具體的には何を指しているのか。結論を言うと、これは白居易の吏隱のあり方を指しているのではないだろうか。ここで次に「物」を楽しむ吏隱のあり方の例を白居易の作品からいくつか挙げて考察してみよう。

まず、大和三年（八二九）に五十八歳で、太子賓客分司として洛陽に在った時期の「池上篇」（白居易集箋校卷六十九）は、履道里の自己の庭園について次のように述べている。<sup>⑧</sup>

都城風土水木之勝在東南偏、東南之勝在履道里、里之

勝在西北隅、西開北垣第一第卽白氏叟樂天退老之地。

地方十七畝、屋室三之一、水五之一、竹九之一、而島樹橋道間之。初樂天既爲主、喜且曰、雖有臺池、無粟不能守也、乃作池東粟廩。又曰、雖有子弟、無書不能訓也、乃作池北書庫。又曰、雖有賓朋、無琴酒不能娛也、乃作池西琴亭、加石樽焉。樂天罷杭州刺史時、得天竺石一、華亭鶴二以歸、始作西平橋、開環池路。罷蘇州刺史時、得太湖石、白蓮、折腰菱、青板舫以歸、又作中高橋、通三島逕。罷刑部侍郎時、有粟千斛、書一車、泊臧獲之習筦絃歌者指百以歸。先是潁川陳孝山與釀法、酒味甚佳。博陵崔晦叔與琴、韻甚清。蜀客姜發授秋思、聲甚淡。弘農楊貞一與青石三、方長平滑、可以坐臥。

都城の風土の水木の勝は東南の偏に在り、東南の勝は履道里に在り、里の勝は西北の隅に在り、西開北垣の第一第は卽ち白氏叟樂天が退老の地。地は方十七畝、屋室三の一、水五の一、竹九の一、而して島樹橋道之間つ。初め樂天既に主と爲り、喜び且つ曰く、臺池

蘇軾の吏隱（湯淺）

有りと雖も、粟無くんば守る能はざるなりと、乃ち池東の粟廩を作る。又曰く、子弟有りと雖も、書無くんば訓ふる能はざるなりと、乃ち池北の書庫を作る。又曰く、賓朋有りと雖も、琴酒無くんば娛しむ能はざるなりと、乃ち池西の琴亭を作り、石樽を加ふ。樂天杭州刺史を罷めし時、天竺石一、華亭鶴二を得て以て歸り、始めて西平橋を作り、池を環る路を開く。蘇州刺史を罷めし時、太湖石、白蓮、折腰菱、青板舫を得て以て歸り、又中高橋を作り、三島の逕を通ず。刑部侍郎を罷めし時、粟千斛、書一車、泊び臧獲の筦絃歌に習へる者指百有りて以て歸る。是に先んじて潁川の陳孝山は釀法を與へ、酒味甚だ佳し。博陵の崔晦叔は琴を與へ、韻甚だ清し。蜀客の姜發は秋思を授け、聲甚だ淡なり。弘農の楊貞一は青石三を與へ、方長平滑にして、以て坐臥すべし。

ここでまず白居易は自己の庭園を構成する要素を詳細に記録し、さらにそこで彼が樂しむ閑適の對象となる物をその収集された順序に従つて具體的に列舉している。それら



は杭州、蘇州の刺史、及び刑部侍郎在任時に手にいれた天竺石、華亭鶴、太湖石、白蓮、折腰菱、青板舫、栗、書、習篋磬絃歌者（樂人、妓女等）であり、また友人たちからもらった酒（釀造法）、琴、秋思（樂曲名）、青石である。このように閑適の樂の對象となる物の具體的かつ詳細な記録は、白居易の作品中に他にも多くの例を見ることができ、彼の閑適の文學の特色の一つと言えるものであろう。

そのような白居易の閑適の文學の一つである、元和十二年（八一七）に左遷されて江州司馬であった時期の「草堂記」（同卷四十三）では、「池上篇」で履道里の庭園を記録したのと同様に、廬山草堂の庭園を構成する諸要素について詳細に説明し、また次のように述べている。

今我爲是物主、物至致知、各以類至、又安得不外適內和、體寧心恬哉。

今我れ是の物の主と爲り、物至りて知を致し、各おの類を以て至れば、又た安くんぞ外適ひて内和らぎ、體寧んじて心恬ばざるを得んや。

ここで白居易は自己がこれらの「物」の主となり、それ

らの「物」が外から彼に快適な状態を與えて彼の内面と調和し、身體精神の安穩を得るとしている。これと同様の内容の「物誘氣隨、外適內和。（物誘ひて氣隨ひ、外適ひて内和す）」という表現がこの「草堂記」の前半に見えるが、閑適の對象である「物」によって精神的充足を得ることは、白居易の閑適に共通する型であるのではないかと思われる。また、會昌三年（八四三）五月に洛陽に引退してからの「太湖石記」（同外集卷下）の冒頭では、閑適における「物の嗜好について次のように述べている。

古之達人、皆有所嗜。玄晏先生嗜書、嵇中散嗜琴、靖節先生嗜酒。

古の達人は、皆な嗜む所有り。玄晏先生は書をみ、嵇中散は琴を嗜み、靖節先生は酒を嗜む。

ここでは白居易が閑適における「物」の嗜好を、「古之達人」以來、傳統的に繼承されてきたものとして肯定していることが窺われる。

このように、白居易の閑適及びその文學は、閑適の對象となる庭園やその構成要素に詳細に注意を拂い、記録し、

それら「物」によって精神の充足を求めようとする面を持つと思われるが、白居易の閑適のこのような面は、伝統的な閑適の型に沿うものとして、北宋の蘇軾より一世代前の文人達に受け継がれている。

例えば、司馬光が、晩年の致仕の後、洛陽に營んだ獨樂園について記した「獨樂園記」（司馬溫公文集卷十三）の庭園の描寫では、

熙寧四年迁叟始家洛、六年、買田二十畝於尊賢坊北、闢以爲園。其中爲堂、聚書出五千卷、命之曰讀書堂。

堂南有屋一區、引水北流、貫宇下、中央爲沼、方深各三尺、疏水爲五派、注沼中、狀若虎爪。自沼北伏流出北階、懸注庭下、狀若象鼻。自是分爲二渠、繞庭四隅、會於西北而出、命之曰弄水軒。堂北爲沼、中央有島、島上植竹、圓周三丈、狀若玉玦、攬結其杪、若漁人之廬、命之曰釣魚庵。沼北橫屋六楹、厚其墉茨、以禦烈日。開戶東出、南北列軒、以延涼颺。前後多植美竹、爲清暑之所、命之曰種竹齋。

熙寧四年迁叟始めて洛に家し、六年、田二十畝を尊賢

蘇軾の吏隱（湯淺）

坊北に買ひ、闢きて以て園を爲る。其の中に堂を爲り、書を聚めて五千卷を出づ、之に命けて讀書堂と曰ふ。

堂南に屋一區有り、水を引きて北流し、宇下を貫き、中央は沼を爲り、方深各三尺、水を疏<sup>わ</sup>ちて五派と爲し、沼中に注ぎ、狀は虎爪の若し。沼北自り伏流北階に出で、懸けて庭下に注ぎ、狀は象鼻の若し。是れ自り分かれて二渠と爲り、庭の四隅を繞り、西北に會して出づ、之を命けて弄水軒と曰ふ。堂北は沼と爲し、中央に島有り、島上は竹を植ゑ、圓周三丈、狀は玉玦の若し、攬りて其の杪を結べば、漁人の廬の若し、之を命けて釣魚庵と曰ふ。沼北は屋六楹を横たへ、其の墉茨を厚くし、以て烈日を禦ぐ。戸を開きて東に出で、南北に軒を列ね、以て涼颺を延<sup>ひ</sup>く。前後は多く美竹を植ゑ、清暑の所と爲し、之に命けて種竹齋と曰ふ。

と、獨樂園の構成を丁寧に記録している。洛陽に致仕し、個人の庭園を營むこと自體が、先に見た白居易の履道里庭園を模倣するものと言えようが、この記の自己の庭園について詳細に記録しようとする姿勢もまた、白居易の閑適の

文學のスタイルをそのまま模倣するものである。

ところが、司馬光がただ素直に白居易の閑適を模倣しているのではないことを示す記述も、この記の後半に見ることが出来る。

或咎迂叟曰、「吾聞君子所樂、必與人共之。今吾子獨取足於己、不及人。其可乎。」迂叟謝曰、「叟愚何得比君子。自樂恐不足、安能及人。況叟之所樂者、薄陋鄙野、皆世之所棄也。雖推以與人、人且不敢、豈得強之乎。必也有人肯同此樂、則再拜而獻之矣。安敢專之哉。」

或ひと迂叟を咎めて曰く、「吾れ君子の樂しむ所、必ず人と之を共にすと聞けり。今吾子は獨り己に足るを取り、以て人に及ぼさず。其れ可なるか」と。迂叟謝して曰く、「叟は愚なれば何ぞ君子に比さるるを得ん。自ら樂しみて足らざるを恐る、安くんぞ能く人に及ぼさん。況んや叟の樂しむ所の者は、薄陋鄙野にして、皆世の棄つる所なり。推して以て人に與ふと雖も、人且し取らざれば、豈に之に強ひるを得んや。必

ずや人の此の樂を同じくするを肯ずる有らば、則ち再拜して之を獻ぜん。安くんぞ敢へて之を専らにせん」と。

ここでは、この庭での樂しみについての「或」(ある人)と「迂叟」(自己)との對話という形で、司馬光の「獨樂」に對する態度が記されているのだが、司馬光はここで、自分の「獨樂」は小さなつまらぬ樂しみなので、他人と共有できるようなものではないが、もしこの樂を共にしたい人があれば、自己が專有するものではないとしている。司馬光が「自分一人の樂しみ」(獨樂)という名をつけた、個人的な退隱後の庭園について記した文章の末尾に、このような他者からの「獨樂」の批判という設定の對話を置いたことから、士大夫には本來的に「獨樂」というあり方が馴染まないと考えられていることが讀み取れるだろう。また、それはこの記の冒頭で、

孟子曰、「獨樂樂、不如與人樂樂。與少樂樂、不如與衆樂樂。」此王公大人之樂、非貧賤者所及也。孔子曰、「飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。顏子一簞

食一瓢飲、不改其樂。」此聖賢之樂、非愚者所及也。若夫鷦鷯巢林、不過一枝、鴈鼠飲河、不過滿腹、各盡其分而安之。此乃迂叟之所樂也。

孟子曰く、「獨樂の樂は、人と與に楽しむ樂に如かず。少と與に楽しむ樂は、衆と與に楽しむ樂に如かず」と。此れは王公大人の樂にして、貧賤なる者の及ぶ所に非ざるなり。孔子曰く、「疏食を飯み水を飲み、脰を曲げて之を枕とするも、樂は亦た其の中に在り。顔子は一簞食一瓢飲にして、其の樂を改めず」と。此れは聖賢の樂にして、愚者の及ぶ所に非ざるなり。若し夫れ鷦鷯の林に巢つくるは、一枝を過ごさず、鴈鼠の河に飲むは、滿腹を過ごさず、各おの其の分を盡くして之に安んず。此れ乃ち迂叟の樂しむ所なり。

と、君子の樂しむべき樂を、『孟子』梁惠王下、『論語』述而を引いて儒教的な理念の枠によって規定し、それに對して君子ならざる「愚者」たる自己の樂として「獨樂」を位置付けていることから明らかである。司馬光がこの記に記した「獨樂」は、「物」と自己との世界の閉鎖的な樂し

みであり、それは「獨善」の言い換えに近い。「兼濟」が理想とされる社會的存在である士大夫にとって、それは非難すべきあり方とならう。

また、司馬光の記にはこのような「獨樂」の閉鎖性を回避する方法も示されている。先の對話部分の司馬光（迂叟）の答えに、「人の此の樂を同じくするを肯ずる有らば、再拜して之を獻」ずるとあるが、これは、個人の「樂」を公開し、他人と共有することによってその閉鎖性から逃れ、「樂」を社會的存在である士大夫に適したものにしようとする工夫と考えることができる。實際、この司馬光の「獨樂園」には蘇軾が寄せた「司馬君實獨樂園」詩（合註卷十五）等の詩があるから、司馬光の言葉通りに「獨樂」の樂は公開されていたことになる。また蘇軾がその詩の中で、「先生獨何事、四海望陶冶。兒童誦君實、走卒知司馬。（先生獨り何をか事とせん、四海陶冶を望む。兒童は君實を誦し、走卒は司馬を知る。）」と、司馬光が世間から囑望されている存在であると表現していることから、政治的活動を停止している状態であっても彼を「兼濟」を旨とする士

大夫として捉えていることが讀み取れる。なお、當時の司馬光は新法に反對して中央から逃がれ、洛陽に住んでいたのであって、彼が自己の庭園に「獨善」と近似の意味を持つ「獨樂」という名をつけたことには、「窮則獨善其身（窮すれば則ち獨り其の身を善くす）」（孟子・盡心上）等に對する意識も働いていただろう。また司馬光自身が記の中で、この園での生活の中心が、讀書して「上師聖人、下友羣賢、窺仁義之原、採禮樂之緒。（上は聖人を師とし、下は羣賢を友とし、仁義の原を窺ひ、禮樂の緒を採る。）」こと（これは『資治通鑑』の執筆を指していると思われる）にあるとするのも、その樂しみが士大夫としての道德の枠内にあることを示すものである。

このように司馬光の「獨樂園記」は白居易流の「物」を愛好する閑適を樂しみながら、その樂を儒教の道德に沿うものとして説明しようとしていたのだが、同様に致仕後の閑適の樂を記した歐陽脩の「六一居士傳」（居士集卷四十四）にも、「物」の愛好とそれに對する自己の態度に關する記述を見ることが出来る。

そもそもこの「六一居士」という號そのものが、書、金石遺文、琴、碁、酒という閑適の樂の對象となる五物と、それを樂しむ主體である自己の六者が、ひとつの閑適の樂の世界を構成していることを示すものであって、「物」愛好の姿勢を繼承したものであると思われるが、さらにその閑適の「樂」のあり方について、「客」と「居士」（歐陽脩）は次のような對話を交わしている。

客曰、「其樂如何。」居士曰、「吾之樂可勝道哉。方得意於五物也、泰山在前而不見、疾雷破柱而不驚。雖響九奏於洞庭之野、闕大戰於涿鹿之原、未足喻其樂且適也。」

客曰く、「其の樂たるや如何」と。居士曰く、「吾の樂は道ふに勝ふ可けんや。方に意を五物に得るや、泰山前に在れども見えず、疾雷柱を破れども驚かず。九奏を洞庭の野に響かせ、大戰を涿鹿の原に聞すと雖も、未だ其の樂しみて且つ適なるを喻ふるに足らざるなり。ここで歐陽脩は「五物」の樂しみに浸りきる様を述べているのだが、この前半の「泰山」と「疾雷」の對は、劉伶

「酒德頌」(文選卷四十七)で酔中の「無思慮」の境地について言う「靜聽不聞雷霆之聲、熟視不覩泰山之形。(靜かに聴くも雷霆の聲を聞かず、熟視するも泰山の形を覩ず。)」を踏まえて、「五物」の楽しみに、あたかも酔ったように夢中になる様を言うものだと思うれる。「五物」の中にも酒が含まれているが、ここで言う我を忘れた楽しみの境地は「五物」に共通のものであって、酒のみに限るものではないだろう。

續く部分で歐陽脩は、仕官している間は「軒裳珪組」と「憂患思慮」が自己の精神を内外から疲勞させ、「五物」を充分に楽しむことができなかつたと言ひ、それに對して「客」は自己を外面から煩わすという點では、世事もこの「五物」も變わりがないではないかと言ふのだが、

居士曰、「不然。累於彼物已勞矣。又多憂。累此者既佚矣、幸無患。吾其何擇哉。」於是與客俱起、握手大笑曰、「置之、區區不足較也。」

居士曰く、「然らず。彼の物に累はさるるは已に勞れ、又た憂ひ多し。此に累はさるるは既に佚し<sup>た</sup>み、幸ひに

して患ひ無し。吾れ其れ何をか擇ばんや」と。是において客と俱に起ち、握手大笑して曰く、「之を置かん、區區として較ぶるに足らざるなり」と。

「居士」は、同様に自己を外面から煩わすものであつても、世事が厭わしいのに對して、「五物」は楽しみをもらすから違ふのだと答えている。しかし、それ以上に説得力のある答えはできずに、この議論自體を棚上げにし、さらにこの文章の末尾では、

吾負三宜去。雖無五物、其去宜矣、復何道哉。

吾れは三つの宜しく去るべきを負ふ。五物無しと雖も、其の去るや宜なり、復た何をか道はんや。

と「五物」が無くても、引退すべきであるから引退するのだと、遂には「五物」による樂が優先されるべきものではないと述べている。

このような「物」愛好の閑適に夢中になる楽しみを知り、それに喜びを見いだしながらも、「客」、つまり他者からその非を咎められ、幾分苦しい言ひ逃れをするという構造は、先の司馬光の「獨樂園記」と共通するものであることに注

意したい。もとより對話形式は議論を展開するために有効な一つの方法であるのだが、ここに登場する「六一居士傳」の「客」と「獨樂園記」の「或<sup>あるひと</sup>」とは、どちらも當時の士大夫の社會の儒教的な道德を體現する、言わば超自我のような働きをして、個人的な「物」愛好の閑適の楽しみの追求へと向かおうとする筆者の心を社會の中につなぎ止める働きをしていると思われる。

つまり、白居易の場合は官吏として求められる儒教的倫理と、「物」の愛好を含めた個人的な楽しみを穩やかに止揚し、「吏隱」という状態に落ち着くことを求めていたわけだが、それに比して北宋の代表的な士大夫である歐陽脩、司馬光の場合は、手放して「物」愛好の「樂」の中に没頭することができなくなっている。このような「物」愛好を警戒する表現は、その他の北宋人には見つけにくいものである。これは、歐陽脩、司馬光という繋がりのある人人が、士大夫である白居易の閑適のあり方を強く意識すると同時に、自らに求められる士大夫としての社會的なあり方をより強く意識し、その中で、自らに適した閑適、吏隱のあり

方を模索している姿を窺わせるのではないだろうか。

既に見たように、蘇軾、特にここで考察の對象としているその知密州期とそれに續く時期においては、既に見たように、「物」への耽溺を否定し、それによって閑適の樂の對象を限定せず、不十分な對象をも楽しもうとする姿勢を見ることができた。蘇軾のこの態度はやはり、既に定型化していたと思われる白居易の「物」愛好の閑適と、それを繼承しながらも、士大夫としての兼濟の道德との兼ね合いを強く意識した、蘇軾よりも一世代前の歐陽脩、司馬光らの閑適觀も踏まえたものではないだろうか。

また、蘇軾自身の白居易の閑適に對する態度は、知密州期の「醉白堂記」（東坡集卷三十二）に見ることができる。

故魏國忠獻韓公作堂於私第之池上、名之曰醉白。取樂天池上之詩、以爲醉白堂之歌。意若有羨樂天而不及者。天下之士、聞而疑之、以爲「公既已無愧於伊周矣、而猶有羨於樂天、何哉。」

故魏國忠獻韓公堂を私第の池上に作り、之に名づけて醉白と曰ふ。樂天の池上の詩に取り、以て醉白堂の歌

を爲る。意は樂天を羨みて及ばざる者有るが若し。天下の士、聞きて之を疑ひ、以爲らく「公は既に已に伊周に愧づる無し、而るに猶ほ樂天を羨む有るは、何ぞや」と。

まず冒頭の部分である。「故魏國忠獻韓公」は韓琦（一〇〇八——一〇七五『宋史』卷三二有傳）。韓琦は生前、私邸の庭園に「醉白堂」を作り、「醉白堂之歌」（『安陽集』卷三には題を「醉白堂」とする。）を作つて、白居易の「池上篇」の世界を模倣しようとしたと述べる。韓琦は仁宗の時陝西經路招討使に任ぜられて功を挙げ、范仲淹と並び稱された人物であるが、彼もまた白居易流の閑適を繼承した人物であつたことがわかる。ここで蘇軾は伊尹、周公という聖人にも恥じない執政者である韓琦が、一士大夫にすぎない白居易を羨むのは何故か、という「天下之士」の疑問を設定しているが、これは歐陽脩や司馬光の記の「客」<sup>あるひと</sup>「或」の問いと同じ構造であり、「天下之士」の考え方は當時の士大夫層に共有される儒教的な倫理觀念を示すものと考えられよう。

蘇軾の吏隱（湯淺）

文致太平、武定亂略、謀安宗廟、而不自以爲功。急賢才、輕爵祿、而士不知其恩。殺伐果敢、而六軍安之、四夷八蠻想聞其風采、而天下以其身爲安危。此公之所、有、而樂天之所無也。乞身於強健之時、退居十有五年、日與其朋友賦詩飲酒、盡山水園池之樂。府有餘帛、廩有餘粟、而家有聲伎之奉。此樂天之所、有、而公之所無也。忠言嘉謨、效於當時、而文采表於後世。死生窮達、不易其操、而道德高於古人。此公與樂天之所同也。公既不以其所有自多、亦不以其所無自少、將推其同者而自託焉。方其寓形於一醉也、齊得喪、忘禍福、混貴賤、等賢愚、同乎萬物、而與造物者遊。非獨自比於樂天而已。

文は太平を致し、武は亂略を定め、謀は宗廟を安んずるも、自ら以て功と爲さず。賢才を急ぎ、爵祿を輕んずるも、士は其の恩を知らず。殺伐果敢にして、六軍之に安んじ、四夷八蠻は其の風采を想聞し、而して天下其の身を以て安危と爲す。此れ公の有る所にして、樂天の無き所なり。身を強健の時に乞ひ、退居するこ



と十有五年、日び其の朋友と詩を賦し酒を飲み、山水園池の樂を盡くす。府に餘帛有り、廩に餘粟有り、而して家に聲伎の奉有り。此れ樂天の有る所なれども、公の無き所なり。忠言嘉謨、當時に效し、而して文采後世に表る。死生窮達、其の操を易へず、而して道德は古人に高し。此れ公と樂天の同じくする所なり。公は既に其の有る所を以て自ら多しとせず、亦た其の無き所を以て自ら少なしとせず、將に其の同じき者を推して自ら託さんとす。方に其の形を一醉に寓するや、得喪を齊しくし、禍福を忘れ、貴賤を混じへ、賢愚を等しくし、萬物に同じくして、造物者と遊ぶ。獨り自ら樂天に比するのみに非ず。

さて、蘇軾の答えの中心となる部分である。ここで蘇軾は「天下其の身を以て安危と爲す」韓琦に對して、白居易をまだ強健なうちに致仕して、その閑適の樂を滿喫した人物として述べている。白居易の閑適に關する描寫は概ね「池上篇」などの記述を襲っている。

「醉白」という韓琦の名付けからは、白居易の閑適に倣

おうとする姿勢が明らかである。しかしここで蘇軾は、韓琦が白居易に倣おうとしたのは、忠義、文學、不變の操、古人に比肩する道德、という自己との共通點なのだとしている。この蘇軾の結論は、この記が韓琦の没後その子の忠彦の依頼に寄つて書かれ、韓琦を顯賞する意味を持つていゝるという事情によるものであるが、加えてそこには白居易流の閑適にこだわらず没入することに躊躇し、儒教的な倫理の中で説明しようとする、宋人としての蘇軾の姿勢を見ることができないのではないだろうか。<sup>⑨</sup>

#### 四

このように、知密州時代の蘇軾は白居易の吏隱のありかたをそのまま踏襲するのではなく、本來は道家的な發想である「物」(對象)からの離脱という考え方を用いて、吏隱をさらに儒教的な兼濟の理念に沿うものとして位置付けようとしていた。そこで本章では、このように意味付された吏隱が、當時の蘇軾個人の日常の中でどのように機能していたかを、詩の表現から考えてみたい。

まず、「西齋」詩（合註卷十三）に着目して考えてみよう。  
まず前半の十句である。

西齋深且明　西齋　深く且つ明らかにして

中有六尺牀　中に六尺の牀有り

病夫朝睡足　病夫　朝　睡り足り

危坐覺日長　危坐して日の長きを覺ゆ

昏昏既非醉　昏昏とするも既に酔へるに非ず

蝸蝸亦非狂　蝸蝸たるも亦た狂なるに非ず

褰衣竹風下　衣を竹風の下に褰げ

穆然中微涼　穆然として微涼に中る

起行西園中　起ちて西園の中を行けば

草木含幽香　草木　幽香を含む

西齋は密州の知事官舎の、知事の私的なくつろぎの場で、  
庭に接していたらしい。ここでは、靜かで明るい部屋で、  
眠りから覺めてぼんやりと日長を過ごす蘇軾のある日の生  
活が描かれている。

さてこの詩では、歴代の注釋者が指摘しているように、  
いくつもの白居易の閑適詩の表現が重ねて用いられている。

蘇軾の吏隱（湯淺）

まず二句目の「六尺牀」は、南宋、施元之が注しているよ  
うに、白居易「小院酒醒」詩（二三七五）の「好是幽眠處、  
松陰六尺牀。（好に是れ幽眠の處、松陰六尺の牀）」を踏まえ、  
吏隱者が身を置くにふさわしい小さな牀を表している。

また、三句目の「睡足」も、同じく施元之が注している  
ように、白居易「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁（香  
爐峯下に新たに山居を卜し草堂初めて成り偶たま東壁に題す）」  
詩五首の其四（〇九七八）の、「日高睡足猶慵起」（日高く睡り  
足りて猶ほ起きるに慵し）を踏まえて、氣ままな吏隱者の生  
活を表現するものであるし、次の四句目の「覺日長」は、  
小川環樹氏、山本和義氏が『蘇東坡詩集』第三冊（筑摩書房  
一九八六年）五四一頁のこの詩の注で指摘されているように、  
白居易「奉和裴令公新成午橋莊綠野堂卽事（裴令公の新たに  
午橋莊綠野堂を成す卽事に和し奉る）」詩（三三三五）の「遠處  
塵埃少、閑中日月長。（遠處塵埃少なく、閑中日月長し。）」を  
意識した表現であろう。

このように二句目から四句目に白居易の詩を踏まえた表  
現が繰り返され、さらに第五、六句目の「非醉」「亦非狂」

が、白居易がよく用いる「非A亦非B」という表現にならうものであることからは、蘇軾が白居易の吏隱のスタイルを意識しているのが明らかであるが、蘇軾はここでただ單純に白居易を祖述しているのではない。以下の句に注目してみよう。

次の五句目の「昏昏既非醉」は、これもまた、施元之が注しているように、白居易の「倣陶潛體詩（陶潛體に倣ふ詩）十六首」の其十二（〇二二四）の次のような表現を踏まえるものである。

我従老大來 我 老大たりし従り

竊慕其爲人 竊かに其の人と爲りを慕ふ

其外不可及 其の外は及ぶべからず

且效醉昏昏 且らく酔ひて昏昏たるに效はん

白居易の表現を踏まえる點では、この五句目の表現もこれまでに見た二句目から四句目の表現と同様であるといえるだろうが、白居易がこの詩で、陶淵明が酒に酔って「昏昏」（ぼんやり）としている状態をまねようと言っているのに對して、蘇軾は「昏昏既非醉」と、ぼんやりとしてはい

るが、酒に酔っているからではないとしており、もとの白居易の表現に變化を加えていることがわかる。

また、このような變化は次の六句目にも見ることができ。「蝸蝸亦非狂」の「狂」は白居易の詩において、世間の規範から抜け出ようとする自己の性格を表す語として、「東都添箇狂賓客（東都 狂賓客を添ふ）」（將至東都先寄令狐留守（將に東都に至らんとして先づ令狐留守に寄す 二七二二）などと用いられているが、ここで蘇軾は、「蝸蝸」（孤獨）であるが「狂」なのではない、と白居易の表現を覆している。

このように、この「西齋」詩において蘇軾は、白居易の吏隱の要素を受け継ぎながらそれを少しずらずらして表現しようとしているが、そこからは、白居易が仕の日常の中に隱の生活を持ち込んで調和させ、それを楽しもうとしていたの<sup>①</sup>に對して、蘇軾に至るともはやそのような仕と隱との調和の幻想に浸ることができないことを讀み取ることができるのではないだろうか。またここでの蘇軾が現役の知事であるのに對して、洛陽時代の白居易が名譽職でしか

かったという立場の違いも、兩者の吏隱のあり方の違いとして擧げることができる。

蘇軾の「西齋」詩の後半部にはこのような白居易と蘇軾の認識の違いが次のように現れている。

榴花開一枝 榴花は一枝を開き

桑棗沃以光 桑棗は沃として以て光る

鳴鳩得美蔭 鳴鳩は美蔭を得

困立忘飛翔 困立して飛翔を忘る

黃鳥亦自喜 黃鳥は亦た自ら喜び

新晉變圓吭 新晉 圓吭に變ず

杖藜觀物化 藜を杖つきて物化を觀

亦以觀我生 亦た以て我が生を觀る

萬物各得時 萬物は各おの時を得たるも

我生日皇皇 我が生は日びに皇皇たり

ここではまず、先に見た九、十句目に登場した「西園」の中の樹木と鳥の様子を具體的に描寫している。「榴花」(さくらの花)が咲き初める初夏、つやつやと光る若葉の陰に身を潜める鳩、啼る鶯。萬物は今、生氣に満ちて輝いて

蘇軾の吏隱(湯淺)

いる。しかし、それを前にした蘇軾自身は、最終句に「我生日皇皇」と表されているように、ただせわしなく日々を送っているばかりだとされている。ここで蘇軾の心は初夏の自然物の明るさから乖離している。

蘇軾がこの「西齋」詩で繰り返し踏まえている白居易の吏隱ならば、詩人は庭園の樹木や石を楽しみ、例えば「雙石」詩(二二〇八)で「石雖不能言、許我爲三友。(石は言うこと能はずと雖も、我と三友と爲るを許す。)」とするように、さらにそれらと親しく交わろうとするであろう。しかし、ここでの蘇軾は庭園の自然物の構成する明るい世界に入ることができず、白居易のように吏隱をわだかまりなく楽しめていない。

さて、この「西齋」詩の最後の二句は、施元之及び、南宋の王十朋が注しているように、陶淵明の「歸去來辭」(陶淵明集卷五)の次の表現を踏まえていると思われる。

木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善萬物之得時、感吾生之行休。已矣乎、寓形宇內復幾時、曷不委心任去留。胡爲乎遑遑兮欲何之。

木は欣欣として以て榮に向かひ、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善みし、吾が生行くゆく休するを感ず。已んぬるかな、形を宇内に寓すると復た幾時ぞ、曷ぞ心を委ねて去留に任ぜざる。胡爲れぞ遑遑として何くに之かんと欲する。

一讀すれば明らかなように、蘇軾の詩は「萬物各得時、我生日皇皇。」という表現だけでなく、自己の生の慌たらしさと對比されるものとして、生氣に溢れた樹木の姿を擧げること、この「歸去來辭」にならっている。つまり蘇軾の理想は、この「西齋」詩のなかで、白居易的な吏隱の方法から次第に離れ、陶淵明的な歸田に向かっているのではないだろうか。官吏としての自己を保ちながら、同時に隱の境地をも實行することを「吏隱」に求めた白居易に對して、仕と隱の兩立を不可能とし、官吏であることを放棄して田園に歸った陶淵明のあり方は對照的なものということができるが、この詩の表現からは、當時の蘇軾が白居易の吏隱の型の中に安住しきれない自己を感じていることを窺うことができる。

このような、吏隱を一時的なものとして、歸田を將來實行されるべき最終的な理想とする表現としては、既に杭州通判期の「六月二十七日望湖樓醉書五絕」（合註卷七）其五の、

未成小隱聊中隱 未だ小隱を成さず聊か中隱す

可得長閑勝暫閑 長閑の暫閑に勝るを得べし

があり、これが、施元之の注が指摘するように、白居易「中隱」詩（二七七）の「大隱住朝市、小隱入丘樊。丘樊太冷落、朝市太囂譁。不如作中隱、隱在留司官。（大隱は朝市に住み、小隱は丘樊に入る。丘樊は太だ冷落にして、朝市は太だ囂譁なり。如かず中隱を作し、隱れて留司の官に在るに。）」を踏まえ、さらに「和裴相公水傍絕句（裴相公の水傍絕句に和す）」（二五八二）の「偷閑氣味勝長閑（閑を偷む氣味は長閑に勝る）」という表現を變化させ、「長閑」、「小隱」をより最終的な目標としているのが挙げられる。

また、文同の吏隱の庭園に寄せた「和文與可洋川園池（文與可の洋川園池に和す）三十首」（合註卷十四）の三十首目、「北園」詩では、

漢水巴山樂有餘 漢水 巴山 樂しみ餘り有り

一麾從此首歸途 一麾 此従り歸途を首めん

北園草木憑君問 北園の草木に君に憑りて問はん

許我他年作主無 我が他年 主と作るを許すや無や

と

と、この北園を、文同が故郷への歸隱を始める出發點として捉え、自分もいつかこの園の主人となり、文同にならって歸隱の道筋としたいと述べている。つまりこの「北園」詩で言う歸田は、文同だけでなく、蘇軾自身の理想でもあるのである。ここからは蘇軾が吏隱を、將來實行されるべき歸田を、それに先立って一時的に體驗できる場として捉えていることが理解できよう。

む す び

これまで本稿で見てきたように、知密州の蘇軾がその官舎庭園の臺に寄せた「超然臺記」には、現實の社會にありながら、その眼前にある事物（これには閑適の樂の對象も含まれる）の持つ差異に一切の價值判斷を加えないことによっ

蘇軾の吏隱（湯淺）

て、自己の現實に満足しようとする姿勢が示されていた。

「物」に對する價值判斷を否定し、また士大夫の「物」に固執することを批判する表現は、知密州期前後の時期の蘇軾の詩文にも見られ、當時の彼の關心の強さを窺わせる。

このような態度は、白居易の、閑適の對象となる「物」の愛好を肯定する吏隱の型に反するものであり、歐陽脩、司馬光ら、蘇軾の周邊の北宋士大夫の詩文にも見ることができ、そこには「物」を愛好する閑適の樂を、儒教的な倫理に沿うものとして正當化しようとする姿勢が見られた。蘇軾の一連の表現もこのような流れの中から生まれたものであろう。また、他の宋人が致仕、歸田を實行したように、蘇軾は白居易の吏隱の型を模倣しつつも、それに満足しきることができず、陶淵明の歸田を理想とする方向に傾いている。これは、自己の現實に對する彼の欲求不滿的な狀況を反映するものだろうが、同時に、當時の彼が吏隱の方法として掲げていた「物」からの離脱も、結局は彼を吏隱という調和の幻想の中に安住させるものとはならなかったことを示しているのではないだろうか。

注

① 本稿に引用した蘇軾の詩の底本には清、馮應榴『蘇文忠公詩合註』（本文中では『合註』と略稱する。）を使用し、文の底本には内閣文庫・宮内廳書陵部藏『東坡集』（古典研究會叢書漢籍之部16 汲古書院 一九九一年）を使用した。また個々の作品の制作年代は、清、王文誥『蘇文忠公詩編注集成總案』によった。

② 蘇轍（一〇三九——一一二二）「超然臺賦」は『樂城集』卷十七、文同（一〇二八——七九）「超然臺賦」は『丹淵集』卷一、張耒（一〇五四——一一一四）「超然臺賦」は『柯山集』卷二、司馬光（一〇一九——一〇八六）「超然臺詩寄子瞻學士」詩は『司馬溫公文集』卷十二、文彥博（一〇〇六——一〇九七）「寄題密州超然臺」詩は『潞公文集』卷三、鮮于侁（一一〇九——一八七）「超然臺賦」は『全宋文』卷一一二六（『國朝二百家名賢文集』卷一七九による）にそれぞれ收められる。なお、蘇軾は文彥博の詩に次韻詩を作っている。張耒「超然臺賦」は「超然」を莊子的な齊物の境地としており、蘇軾の「超然」をさらに發展させたものかと思われる。李清臣（字邦直）も「超然臺賦」を制作していることが蘇軾の「書李邦直超然臺賦後」（東坡外集卷三十九）からわかる。李清臣の原作は未見。

③ 蘇軾は「喜雨亭記」（東坡集卷三十二）、「蓋公堂記」（同卷三十二）を作っており、黃樓を巡る蘇轍、秦觀らとの詩文の

應酬も見られる。

④ 『漢書』卷五十六董仲舒傳所收の董仲舒の對策「人受命於天、固超然異於羣生。」孫綽「遊天臺山賦」（文選卷十二）「釋域中之常戀、暢超然之高情。」賈誼「鵬鳥賦」（同卷十三）「真人恬漠兮、獨與道息。釋智遺形兮、超然自喪。」成公綏「嘯賦」（同卷十八）「感流俗之未悟、獨超然而先覺。」等の表現がある。

⑤ 熙寧十年十二月徐州へ向かう途中で制作された「顏樂亭詩」（合註卷十五）でも、「天生蒸民、爲之鼻口。美者可嚼、芬者可嗅。美必有要、芬必有臭。我無天遊、六鑿交闢。驚而不反、跬步商受。」と、美惡、芬臭の感覺に翻弄される自己の姿を描いている。

⑥ この「墨妙亭記」のように、他人の作った亭臺に寄せた文にその造營を批判する意を含ませるのは、一般的なものではないと思われるが、ここでは孫覺が蘇軾と親しい友人であるので、軽い戯れの氣分を含んだ表現かと思われる。なお本文中でも觸れたように、蘇軾は「凌虛臺記」でも、上官である知鳳翔府の陳希亮が造營したこの臺が無常の存在であるとして、批判的とも取れる表現をしており、陳希亮に對する蘇軾の感情を窺わせる。

⑦ 蘇軾と親しい文同の竹愛好は、「物」への固執と言えるものと考えられるが、蘇軾は元豐二年の「文與可畫員當谷偃竹記」（東坡集卷三十二）で文同の畫竹について、外物として

の竹を描くものではなく、竹に内在する理を捉え、胸中の竹を描くものとしている。

- ⑧ 白居易の詩文の引用、及び編年は朱金城氏『白居易集箋校』（一九八八年上海古籍出版社）に依った。なお引用した白居易の詩の題後の番號は、花房英樹氏による白居易作品番號である。

- ⑨ 白居易の閑適に對する同様の評價は、司馬光「洛陽耆英會序」（司馬光文集卷六十五）にも見ることができ。

- ⑩ 白居易の詩において「非A亦非B」という形の表現が多用されることについては、川合康三先生が「韓愈と白居易——對立と融和——」（中國文學報 第四十一冊 一九九〇年四月）で指摘されている。

- ⑪ 白居易が杭州刺史であった長慶三年（八二三年）の「官舍詩」（〇三六三）には「何言太守宅、有似幽人居。太守臥其下、閑慵兩有餘。」と、「太守」という呼稱を用いることによって、自己を官吏として位置付けながら、その「太守」の居處が、隱逸者たる「幽人」の住まいのようであり、さらに、その屋敷で太守が「閑」「慵」という隱逸者の境地を味わうと表現するのは、官吏でありながら、隱逸者の境地を生活のなかに

取り込もうとする姿勢を示すものであろう。さらに、江州司馬時代の「閑居」詩（〇三二六）では、「幽獨已有餘、何必山中居。」と、隱逸の楽しみである「幽獨」は、必ずしも「山中居」でなくても得られるものだとしている。

- ⑫ 蘇軾は「北園」詩を洋川詩群の最後に配列しているが、『丹淵集』所收の文同の原詩は「北園」を二十六首目に置き、三十首目には「此君菴」を配している。この「北園」を最後に置くのは、蘇軾、蘇轍のみであり、吏隱の彼方にあるべき將來の歸田を強調しようとしているのではないだろうか。

- ⑬ 蘇軾、文同らの洋川園地詩の唱和については、山本和義氏が「洋川園地詩考——蘇詩割記——」（アカデミア 一九八五年）で、また吏隱の詩としての性格は、同氏が「洋川吏隱詩考——蘇詩割記——」（アカデミア 一九八六年）で詳述され、「洋川吏隱詩考」では特に「野人廬」詩について吏隱を「爲しえぬ歸隱の代償行爲の場」とであるとされている。

附記 本稿の要旨は日本中國學會第四十五回大會（一九九三年九月二十五日 於大阪）において、「仕と隱——蘇軾の密州知事時代——」の題目で口頭發表したものである。貴重なご意見、ご教示を賜った多くの方々に、深く御禮申し上げます。